

われはうたへども
やぶれかぶれ

室生犀星

講談社版

われはうたへどもやぶれかぶれ

昭和三十七年五月十日 第一刷發行

定價 三七〇圓

著者 室生犀星

發行者 野間省一

印刷所 豐國印刷株式會社

東京都文京區大塚坂下町一一四

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町三ノ十九
振替 東京 三九三〇
(製本大製)

目次

われはうたへども
やぶれかぶれ

明治の思ひ

私の履歴書

三

青春放浪

一七

火中の人

一九

われはうたへどもやぶれかぶれ

題簽 陸地梅太郎

われはうたへどもやぶれかぶれ

詩を書くのにも一々平常からメモをとつてゐる。メモの紙切れをくりながらその何行かをあはせようとすると、それがばらばらになつて粘りがなくなりどうしてもくつ附かない、てんで書く氣が動かないで嘔氣めいた厭氣までがして来る。こんな筈がないと紙切れを讀みなほしてゐる間に、頭に少しもなみが打つて來ないで只のふろしきを展げたやうに、ぼやぼやと、よりどころがない、やはりだめだ、机の上を片づけながら臥てしまふ。この六十日くらゐの間にも書いてゐないで、只、うつらうつらと寝るにまかしてゐた。書くしやうばいをしてゐる奴が書くことが出來なくなると、一行もはたらかなくなつてしまふ。病ひの重さもさうだが、頭がかすかすになつて水分も油氣もなくなるのだ、例のふろしきのやうな奴が夜晝なしにふうはりと冠つてゐた。私はその下にゐた。ああいふ詩がつづり合せられなくなるといふことは餘程のことだ、出來てゐる行と行とを合せてゆけばよいだけなのに、口から、はあはあと大息を吐いてまゐつてしまふ。これは餘程のことだ。

日が暮れ夜も九時になることが怖い。遅鈍な尿意がもよほしてそのために一時間か一時間半ごとに、起きてはばかりに行かねばならなくなる。それも尿量の放出があればいいのだが、つんぼのやうに悲しい閉尿の待ちぶせに合ふのだ。なんとしても出ないのだ、出てもわづかばかりのしづくしか出ないのである。それでもよろこびとしなければならぬ。他人を騙すやうに私はいまおしつこなぞしたくないのだと呟く、おしつこがしたい奴はべつに庭の中をうろついてゐて、犬のやうに昨日自分でしたところに躓んで、山に穴のあくほど咳をしてゐるあいつのこをいふのだ。此處にある私は出ても出なくともちつとも、かかはりのない處にある人間なのだ。頭はれいろうとしてゐるし尿の事には無關心なのである。私はまったくおしつこなぞしたくないんです。苦情は先刻此處に跨つてゐて、いまでも庭をぶらついてゐるあいつの言分なんです。その證據には私はもう歸りかけてゐるくらゐです。さつぱりと快い氣分になつてあるだけの重い残尿を放出して、あなたの處からかるかと出てゆかうとしてゐる。あなたの眞白なお腹は私をうけつけてくれなくとも、それはどうでも宜い、どうでも宜いのだがちよつとだけさせてくれませんか、ちよつと些んのしづくでもそのお腹のうへに出させてくれませんか。私の全身は蒼ざめ此處で最早あなたに跨つてゐられないくらゐ、困憊しきつてふらふらになつてゐるのだ。ほんたうのことを言へばさうなのだ、どんな大切な物と交換してもよいから、ちよつとだけ普通の人間のやうに小便させてくれませんか。これは今夜のねがひなのだ、今夜のねが

ひは後ろに何十年もやつて來た果の果のねがひなのだ。だが閉尿は固く遂に私の膝がしらも腰もしびれ、扉につかまりながら私はやむなく廊下に出て行く。

寢所にはいるとまた起き上つて足袋をはき、羽織を着てはばかりに往く用意をする。どうにもじつとはして居られないのだ。書齋から茶の間への襖一枚、茶の間から勝手 of 板戸を開け、次の化粧の間の襖から湯殿への板戸が締まり、その小廊下の板戸から離れに渡る三尺の土間を飛び越えねばならぬ。はばかりはその離れの縁側づたひにあるのだ。都合六枚の戸がどんなに氣をつかつて見ても、戸の軋る音が何處かでして來る。勝手から化粧の間の戸を明けると電燈がぱつと點く、毎晩の氣違ひじみた便所通ひに黙つてゐられなくなつて節マリ子が、からだを夜具から半身起していふのだ。先刻^{さつき}いらつしたばかりなのに大變でございますね、お廊下の電燈をおつけしませうか、いや、そのまま電燈を消して寢てゐなさい、起きないでくれと私は懷中電燈をかざして三尺土間を離れに向つて飛び越える、その突き當りの部屋に奥テル子が寢てゐた。そこでもまた電燈がかつと點く、節マリ子は四年も手傳つてくれてゐる少女だが、奥テル子は二年近く一緒にゐて私の身の廻りのことをしてくれる少女、二人に私は夜中には起きてくれないやうに言つて置いた。たいがい、あそこにある時間は短くても三十分はかかるのだ。今年は雨ばかりで輕井澤の夜氣は冷たい、その間ちゆう起きてゐて貰ふことはからだが冷え切つて了ふ。だから起きないやうにいふのだ。私は三十分ばかり跨つてゐても、とても出な

いことが判ると、最後の方法として庭に出て後ろ山の石垣下にゆくより外に、行く處がない、私が三尺土間をまた飛び越えたと間もなく奥テル子の部屋の電燈が消え、化粧の間を抜けると節マリ子の電燈も消えた。そして私は書齋にもどると烈しい咳にたたみ込まれ、腹を折つてそれを耐へてから立つて雨戸を一枚明けると、用意してある草履に足を突っかけ庭に下りた。全身の蒼白が額にあつまつて汗を掻いてゐる。心にある熱い焦りが外の冷氣もなにも感じないくらゐである。

石垣の石につかまり躓みながら一呼吸いれると、あれほど閉ぢてゐたやつが少量ではあつたが、黒い土のうへをもつと黒く沁みこんで放出されることを知つた。音も感じもない、所と場所を變へれば出ることは何時も最後の手段ではあつたが、今夜はあまりに旨くいつて石垣の間にある僅かばかりの土の上に、用事あるげに這ふ羽根のある一疋のむしを見出した。全くこのむしは用事があつて夜中に歩いてゐるのだ。私の用事は次の時間の来るまでにもう終つた。あと二時間後にはまた起きねばならないのだが、ともかく今はその用事が終つたのである。雨戸を締めようとして後ろ山の景色を見たが、曇天でかさかさして美しくなかつた。明るい電燈の下で尿意から放たれたからだを横たへると、ずつと暗い處ばかりにゐた眼にはこんな電燈があかるくては、何も彼もたすかつたやうな氣になり、うがひをしてから水を飲み、喉を充分に濕らしてから手を伸ばして煙草を一本つまみあげた。煙草をのめば目に見えて咳込んでくるし

其くるしい少時の間は、どんなに酷くてもこらへねばならぬ。けれどもこの山の中の電燈があまりにかうかうとかがやいてゐる嬉しさは、せめて煙草をのむことで現すより外に現しやうもない、水を飲めばすぐ尿意にからんで來るので、水とか茶とかビールとかは夕方前には一さいとらなかつた、だから煙草をのむよりほかにいまのかうかうとした明るさに代へるべきものがない、煙草をのめば睡れないから睡眠劑までのまねばならないことは判つてゐる、私は火を點けてゆつくりと深くけむりをのみこんだ。うまかつた。みるみる私は平常はたらく晝間の私に出會ひ、料理店で料理を食べてゐる私の張つた胸を見出して、そして不意に冷えた自分の舉丸にさはつて見ていまさらに驚いた。何時も三四十分の間腰から下は外の冷氣とおなじ所で、この者はつねに裸でまるだしのありさまであつた。冷蔵庫の中にある奴と同じであるから、はばかりから歸つて來ると私は自分の手のひらでこの者を何時も少時あたためてやつてゐた。あたためてやらないと睡りが遠退いてゆくからだ。何時か齒醫者が齒だつてあたためなければならぬと言つたが、この者の冷えのふかいことは手のひらが冷たく沁みて來ることでも判る。そして自分の廣漠としたはなればなれになつた胴とか手とか足とかの、それらのもだえ悲しみ冷えの類がみんなここに集まつて、或るときはただ他愛もなくわあと言つて啼いてゐる時もあるし、或るときは冷却しきつて今夜のやうに據りどころもなく、ぶらりとして言葉もないありさまの時もある。平常はちつともその動靜を見てやらないのに何の苦情もなく、この者はただ温

和しくしてゐるばかりなのだ。怒つたこともないし悲觀したふうも見せたこともない、そしてからだの中のどの部分にくらべて見ても、かつてこれをとくに愛したことすらなかった。寧ろ邪魔氣で、あつてもなくても宜いといふ虐待氣味の、ふだんの扱ひやうになれて男はみんな打棄^{ちや}らかし放題であつた。少年の時分に友達と列んでこれを手のひらの上に大切さうに載せ、ふしぎを蒐めてゐるくせに平凡な、此中にある玉にふれることの怖さを何時の間にかおぼえてゐた原始觀念が、成長と一しよに薄れてしまひ、つひにわすられいまは今夜のやうに、ひえて石ころのやうになつてゐた。手のひらのあたかさが玉の深部に脈を打つてつたはり、手のひらは鐵片か石ころを掴んだときの冷えを感じてゐた。併し私はこの者はつねに冷えてゐてもよいものではないか、寧ろ冷蔵庫入りの物ではないかと戲談にさう思つたりして、若し冷蔵庫入りの物だとしたら餘りあたためてゐては、却つて毒ではないかと、一人でからからと笑つて見た。午前二時の私の感想はふたたび人間はどうにもならないと、自分のからだから笑ふ材料を引き出すものに思つた。

うとうとすると、私はまた足袋をはき、着物をととのへて寢所をはなれて書齋の中でこれを行ふべく用意にかかつた。二個のしびんに代るがはる立ち對ひ、跼んだり立つたりしてみたが、がんとして尿の通りがなかつた。疊の上に坐つてこんなことを繰り返して一たいどうする氣かといふ、何時もの當然の問答をくり返してみた。すぐ立つて出ようとしたが、あれから一